

むかしの

絵でみることわざ



ちょっと
めずらしい



小学校高学年向け

“ことわざ”とは？

ことわざは「^{たと}譬(例)え」ともよばれるように、人のおこないや物ごとのあり方を特定の^{ことば}言葉に例える^{ひょうげん}表現方法です。

ことわざは私たちの先祖のくらしの中から^{ち え}生まれ出され、生活の知恵として伝えられているものです。

ことわざは絵の題材となったり、
絵と文字を組み合わせて表現ひょうげんされてきま
した。

ここでは昔の人がえがいた絵をそえて、
ちょっとめずらしいことわざを取り上げ
てみましょう。



紙本墨画 鬼提灯釣鐘図
野々口立圃
江戸時代（17世紀後期）

ちょうちん

つりがね

提灯と釣鐘

軽いちょうちんと重いつりがねではつり合いが取れるわけがない。物ごとが道理にかなっていないこと、あり得ないことの例え。

ひょうたん なまず
瓢箪に鯰

丸いひょうたんでぬるぬるしたナマズを押さえられるだろうか。やってみるものの、できるわけがないことの例え。



版画 猿瓢箪鯰図
久保田米僊 明治時代（19世紀後期）



そらねんぶつ
鬼の空念仏

じゃ悪な鬼が心にもない念
仏を唱えることから、うわ
べだけよい行いを取りつく
ろうことの例え。

み
満つれば欠くる



満月は次の夜からだんだん欠けてゆく。一番よい時をむかえた後はおとろえるばかりということ。

浮世たとえ 明治時代初期 (19世紀中期) から



馬には乗ってみろ

聞いたり見たりするだけでは物ごとを理かいていけない。やってみてはじめてよくわかること。



ポンチにならゐて 教訓たとへ草
東斎 明治時代初期（19世紀中期）から

ね み み
寝耳に水

予想もしないことが起きておどろくようす。不意をつかれてあわてふためくことの例え。

くさ たい
腐っても鯛



ポンチにならゐて 教訓たとへ草
東斎 明治時代初期（19世紀中期）から

もともと立っぱなものは、多少ぐあいが悪くなっ
ていてもそれなりによくみられてしまうこと。

い 煎り豆に花

熱を加えていたためた豆は発芽しない。ありえないこと、あるいはありえないことが起こったことの例え。



ポンチにならみて 教訓たとへ草
東斎 明治時代初期 (19世紀中期)
から



人こころ浮世乃たとへ
三代歌川広重 明治時代（1668）から

ほとけ

仏つくって

たましい

魂入れず

何ごとも心がけがだいじ。
見た目には立っぱにできたけ
れども、かんじんな点がおざ
なりになっていること。

いわし

鰯の頭も信心から

教訓いろはたとへ
歌川芳盛 江戸時代（1862年）
から



つまらないものも信心によってありがたいもの
のと思ってしまうこと。あるいは、つまらな
いと思われることでも、信じておこなえば物
ごとをなしとげるきっかけになるということ。



教訓いろはたとへ
歌川芳盛 江戸時代 (1862年)
から

あり とう

蟻が塔つむ

小さなことでも積み重ねれば大きなものになること。
小さな者も力を合わせれば大きなことをなしとげられること。

ぬすつと ひるね
盗人の昼寝

夜に行動するため、どろぼうは
昼間にねることから、物ごとには
何にでも理由があるということ。



教訓いろはたとへ
歌川芳盛
江戸時代（1862年）から

いも に
芋の煮えたも
ごぞんじなし



教訓いろはたとへ
歌川芳盛 江戸時代 (1862年)
から

えらそうにしている人、育ちのよい人
などが、ふだんのあたり前のこともわ
かっていないことをからかう意味。



譬へ尽し
二代歌川広重
江戸時代（1864年）
から

すずめ せんこえ つる ひとこえ

雀の千声、鶴の一声

大ぜいが意見を言い合ってまとまりがつかないところ、立場ある人の一声で物ごとが決まる例え。